イ　幹部構成員が、構成員に対し、「生死を懸けた帰依が必要」、「私たち弟子がやるべき実践は、グルが求めておられる帰依の実践である」などと指導し、それを受けた構成員も、「心からの敬愛と尊敬の念が尽きず、グルの救済に一層精進したい」、「グルは本当に偉大」などと述べており、幹部構成員から末端の構成員に至るまで麻原への絶対的帰依を示していること

ウ　麻原の脳波が注入されるとするＰＳＩと称する修行用器具を頭部に着用させたり、過酷な修行を長時間にわたって行わせるなど、両サリン事件当時と同様のマインド・コントロールの手法を用いた修行及び儀式等を通じて、麻原に対する絶対的帰依を扶植していること

エ　機関誌等に「グルの意思の実践はすべての魂の救済である」旨の内容を掲載するなど、麻原の意思の実現を団体の活動の根本的な目的としていること

オ　麻原からの明示的な指示がない場合でも、かつて麻原が説法した内容を基に位階の名称を変更するなど、麻原の意思を推し量りながら重要事項を決定していること

等から、麻原が「Aleph」の活動に絶対的な影響力を有していることは明らかである。

(2)　「ひかりの輪」は、麻原の意思に基づいて設立され、観察処分を免れて本団体を存続させるために、「麻原隠し」を行っており、その存在及び活動自体が麻原の影響下にあるものと認められる上、現在も、

ア　「麻原隠し」の実践として、祭壇からの仏画の撤去や大黒天像の焼却等を行っているが、立入検査後、発見のおそれがない場面においては仏画を再掲示するなど、態様を変えながら麻原に対する崇拝を継続していること

イ　上祐を始めとする幹部構成員から末端の構成員に至るまで、「麻原の霊的な力は本物」、「今でもグルは麻原」などと麻原への深い帰依を示していること

ウ　麻原への絶対的帰依を求める危険な教義を収載した「尊師ファイナルスピーチ」や、殺人をも肯定する教義を収載した「ヴァジラヤーナコース教学システム教本」を始め、麻原の説く「オウム真理教」の教義を収載した書籍等を多数保管しており、これを使用している状況もうかがわれること

エ　「ひかりの輪」が使用している教本等に麻原の説法等と同様の内容が多分に含まれているほか、「ひかりの輪」の修行等にも麻原が確立した特徴的な技法等の本質的部分が維持されており、麻原が確立した教義及び修行体系の継承が認められること

等から、外形上、麻原の影響力を払拭したかのように装っているものの、実態は、依然として、麻原が「ひかりの輪」の活動に絶対的な影響力を有していると認められる。

同項第二号該当性

(1)　両サリン事件の首謀者である麻原は、自らが本団体の代表者たる役員である旨明確に供述しており、現在も、弁護士及び家族等との面会を通じて、本団体の意思決定に関与することが可能である。そして、本団体においては、麻原が明示的な指示を出した場合にはこれに従い、これがない場合にも、麻原の説く教義等により顕現している麻原の意思を推し量りつつ、組織運営を継続しているのであるから、麻原は、現在も、本団体の代表者たる役員であり、かつ、構成員であると認められる。

(2)　また、両サリン事件のいずれかあるいは双方に関与した者のうち、角川知己については、本団体が、法に基づく公安調査庁長官に対する報告において、構成員と明記している。遠藤誠一、新實智光及び横山真人の三名については、麻原及び麻原の説く教義に従い、本団体の構成員であることを自ら認めており、本団体も、除名等の処分を下しておらず、現在も構成員として取り扱っているものと認められる。したがって、角川知己ら四名は、現在も、本団体の構成員であると認められる。

同項第三号該当性

前記のとおり、両サリン事件の首謀者である麻原は、現在も、本団体の代表者たる役員であると認められる。

また、上祐、松本明香里及び松本麗華の三名は、両サリン事件当時、いずれも麻原に次ぐ「正大師」の位階にあり、当時の「オウム真理教」が敷いていた省庁制度において、それぞれ「ロシア支部大臣」、「郵政省大臣」、「法皇官房大臣」として、本団体の重要な業務を統括し、本団体の意思決定に関与し得る立場の役員であったと認められる。そして、現在も、上祐は、本団体の内部組織である「ひかりの輪」の代表者として活動し、松本明香里及び松本麗華の両名も、本団体の内部組織である「Aleph」の幹部構成員等と連絡を取りながら、「Aleph」の活動方針等の重要事項の意思決定に関与しており、上祐、松本明香里及び松本麗華の三名は、現在も、本団体の役員であると認められる。

同項第四号該当性

(1)　本団体は、麻原の説く「衆生救済」を実現するため、麻原の理想郷（シャンバラ）を我が国に建設する「日本シャンバラ化計画」を推進するとともに、「衆生救済」に至る最速の道であり、必然にして唯一の方法として「タントラ・ヴァジラヤーナ」の教義を最も重視してきた。この教義は、結果のためには手段を選ばず、本団体の活動に反対する勢力や悪業を積む者については、これを殺害することも正当化されるなどとする殺人をも肯定するものである。

(2)　この点に関し、「Aleph」については、麻原への絶対的帰依に基づき、幹部構成員が、構成員に対し、麻原の説く「衆生救済」の実現に向け、「タントラ・ヴァジラヤーナ」を実践することが必要不可欠であると指導し、これを受けた構成員も両サリン事件を始めとする一連の凶悪事件がその実践として正しいものであったと肯定するなど、同教義が構成員に浸透している。

「ひかりの輪」については、上祐を始めとする構成員が、麻原に絶対的に帰依するとともに、麻原の説く「衆生救済」の実現に向け、上祐が「タントラ・ヴァジラヤーナ」に関する説法等を行い、構成員も両サリン事件を肯定しているほか、同教義を収載した教材を保管しており、これを使用している状況もうかがわれること等から、同教義を保持しており、それが構成員に浸透しているものと認められる。

以上の事実から、本団体は、現在も、殺人を勧める綱領を保持している。

(五)　同項第五号該当性

本団体については、前記(一)から(四)に掲げた事実のほか、

(1)　両サリン事件当時、麻原を頂点とし、麻原の指示に絶対的に従う上命下服の位階制度を敷き、一般社会と隔絶した独自の閉鎖社会を構築したことが、組織的かつ秘密裏に両サリン事件を計画・準備し、実行することを可能にしたところ、現在も上命下服の位階制度や外部の情報を遮断した一般社会と隔絶した独自の閉鎖社会を維持していること

(2)　本団体の代表者かつ主宰者である麻原が、両サリン事件についての自己の責任を否定し全く反省していないほか、幹部構成員が両サリン事件の責任を社会・国家に転嫁してこれを正当化していること

(3)　立入検査に対し非協力的な姿勢を示しているほか、「串刺し写真」が「Aleph」の施設内で発見されるなど、現在も、一連の凶悪事件を実行した当時と同様の反社会的かつ危険な体質を有していること